

『天から下ってきたパン』② (ヨハネの福音書 6章 41-52節) 2020.10.11.
<はじめに> パンを求めてイエスを追いかけて来た群衆の追求が、ここに至って鈍り始めます。イエスの語られることがよくわからなかったからです。期待と信頼がぐらつくとき、私たちはどう対処しているでしょうか。

I 文句を言うユダヤ人

① 群衆⇒ユダヤ人(41-42)

イエスを取り囲んで対話して来た群衆の中にいたユダヤ人たちは、イエスの「わたしは天から下って来た」の表現を見過ごしにできませんでした。彼らはイエスの出自を知っており、その彼が神から遣わされた者である、と名乗ったことに不満を抱きました。

② 自分たちの間で(43)

ユダヤ人の文句は小声で、自分たちの間で交わされたものでした。それをイエスは諫めます。今まで彼らはイエスと対話して来ましたが、41節以降はイエスに直接話すことを止めて、小声で近い者同士で異議を唱え始めます。よく見かける光景です。

③ イエスの呼び掛け(43)

イエスは、彼らの顔が自分から逸れて行くのを見逃さず、43節の警告を告げます。イエスとの対話を止めてはなりません。不満・疑問・異論さえも、イエスに投げ掛けてよいのです。イエスはなおも彼らに語り続けていますが、もはや対話にはなっていません(52)。

II 父が引き寄せせる者

① 「イエスのもとに来る者」(44)

独特なこの表現は、37・45節にも出て来ます。イエスを遣わされた父が引き寄せられることが、イエスのもとに来る必須条件です。父なる神は今も人をイエスに引き寄せようと働いておられます。神はどんな手段・方法を用いて働いておられるでしょうか。

② 神によって教えられる(45)

神の人への自己開示を「啓示」と言います。自然界や人間の人格・良心、歴史の出来事から、神についてある程度理解できます(一般啓示)。更に奇跡と不思議、ユダヤ人の歴史、聖書、神の御子イエスを通して、神と御心はより明確に現されています(特別啓示)。

③ 父を見た者(46)

父なる神を人は見たことがなく、見ることはできませんが、これら啓示によって神を知ることができます。その筆頭が天から下って来たイエスです。父なる神は私たちをこのイエスに引き寄せようと今も働かれ、イエスを通して私たちは父なる神を見るのです。

III このパンを食べる者

① 信じる＝食べる(47)

出された食事を食べるには、提供者を信じなければなりません。また、食べるとは自らが生きるために他のいのちをいただくことです。食べ続けなければ私たちは生きられません。それは肉体だけでなく、霊の世界でも同様です。

② 先祖はマナを食べた(49)

マナは神の奇跡で、ユダヤ人の先祖はこれを食べたが、死にました。彼らの「食べる」と、イエスの「食べる」には、食べた物が違います。それとともに、神からの啓示である奇跡に触れ、それに与るだけでは、イエスの示す「食べる＝信じる」には至っていません。

③ わたしはいのちのパン(48,50-52)

信じる者が持つ永遠のいのちは、終わりの日によみがえることで明らかにされます(44)。永遠のいのちを与え、支える食物は、天から下って来た生けるパンであるイエスです。それはやがてご自身のからだ(肉)を与えることで実現しますが、何を指しているのでしょうか。

<おわりに> 父なる神は、今まで見聞きしたことのない新しい食べ物を私たちに差し出されます。それは天から下って来たイエスです。それをいただきましたか。今もいただいているでしょうか。躊躇を覚えるなら、父なる神にさらに尋ねれば良いのです。横を向いてはなりません。(H.M.)